

空



2005年
SORA

9号

晴夜 (9) | 2

柴田 佐知子

膝掛の尖りて父の老い定か

ぼろ市の打ち上げられしごと並ぶ

ぼろ市のいきなり重きもの提げて

まだ青き僧の過ぎたる冬桜
煤掃きの一堂に人余りたる

宮崎・米一丸の墓

凧に米一丸のこゑ混じる

闇汁や抗ふものもぶち込んで

闇汁や噛みて分からずじまひなり

口あけて声は無かりし雪女郎

冬三つ屋

荒井千佐代

漁具小屋の隅々乾く柿熟れて

鶏鳴のしはがれ背高泡立草

凧どきの舟に菜を干し舟に住む

わが膝に嬰のふんばる冬あたたか

ピアノ無き小さき保育所冬木の芽

山間に海すこし見ゆ雪催ひ

高千夏子様へ

「空」八号では、お言葉ありがとうございます
ございました。私の悩みは深く、まだ
大事に抱え込んでいます。でも「生きる」
ってことを実感するって、こんな
ことかな？なんて、明るく考えられる
ようになりました。

現在は、保育所の三才児との別れが
迫り、淋しさと慌しさの中にいます。

「首の坐らない頃から英郎のことを
見て戴きありがとうございました。す
くすく元気に育ったのは先生方にかわ
いがって戴いたからだ」と感謝していま
す」

「生後五十七日からお預けし、間も



なほ奥に聖泉のある冬木立

冬の蝶グレゴリオ聖歌弾きをれば

短艇の水尾のしろがねクリスマス

園児みな父母へ渡せり冬三つ星

聖夜弥撒はじまる手燭ゆきわたり

ポインセチアの傍に重ぬる聖歌集

冬銀河ちちの家守る姉ひとり

とろ箱にパセリの育つ寒月光

冬耕の石に休むは祈るごと

なく四才になろうとしています。私が安心して勤められたのも先生方のお陰です。御礼申し上げたいのは、この間めぐみがただの一度たりとも「保育所に行きたくない」と言ったことがない事です」―連絡帳にお母様方からこの様な言葉を戴いては、行き届かなかった保育を一人省みたりしています。御礼を言わないといけないのは私の方、多くの感動や幸せを戴きましたもの。

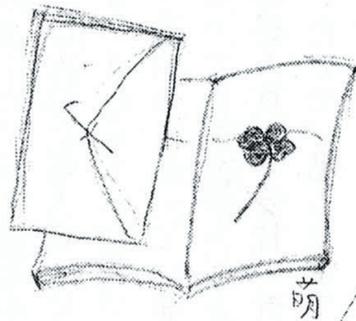
先程、ミサのオルガン弾きから戻り（毎土曜の夜が、私の当番なので）お便り書いておりましたら、東京から吉報が飛び込みました。同じ結社の辻美奈子さんが「俳人協会新人賞」に決まったそうです。すばらしい句集でしたから、きつと取れると思っていました。が、現実となつてとても嬉しいです。私の「朝日俳句新人賞」の受賞の折も駆けつけて戴いたので、私も上京できたらと思っています。

「悩み、また良し」そういう心境へ少しずつ近づいているように思える今日この頃です。

短日

高倉恵美子

念入りに門松の竹選びけり
めづらしき雪となりたる晦日かな
年用意帰りたる子に任せけり
年迎ふ手窪に菓増やしつつ
連山に雪の残れる三日かな
七草を呼びとめられて貰ひけり



毎日新聞の「はがき随筆」へ投稿するようになって七年が過ぎた。月に一度は出したいと思っているのだがなかなか難しい。字数にしてわずか

同窓会みなでつなぎし手毬唄

粧へる鏡の端の残り雪

六十年経ちし友の死紅椿

侘助や亡き友若きままなりし

剥落の薬師仏にも冬日濃し

スコップを持ちて大根引きにゆく

短日や畑を巡り家巡り

物言へぬ友の手握る冬日向

大寒の墓に遊べる雀かな

二百五十字足らずの内容だが投稿した皆の文章には温かい心がつまっていたに感動したり笑ったりと毎回楽しみである。

投稿し始めた頃はまだ小学生だった孫のことを書くことが多かった。今、昔の自分の切り抜きを読んでもみると当時の出来事が浮かんてくる。

「僕は今日卒業します。小さい時から今まで見守ってくださってありがとうございました。ございました。これから中学生になります。今まで本当にありがとうございました。」卒業式に行った孫からその日の朝届いた手紙だった。何時も一緒にいるのに涙がこぼれた。

その子も中学三年生、すっかり声変わりして背も大きくなり、昔のように孫のことを書くことも少なくなつた。今まで色々なことを書いてきた「はがき随筆」は生きてきた証みたいなのである。これからも出来る限り続けていきたいと思う。

柴
薬

遠野 萌

落し文ひらけば文字の消えゆけり

ロッカーに朱纒ごろりと博多駅

新藁の草鞋下げある神の前

バルーンフェスタ

バルーンの影響が刈田に混み合へり

蔦紅葉祠はいつも掃かれぬて

大楠の注連の吹かるる嚏かな

・朗読・

朗読が好きで新聞や本で美しい文章に出会うと思わず声にしてしまう。あの時、朗読員養成講座の募集を知り、受けてみることにした。それは自分の好きな本のさわりの部分をテープにとり、それを試験官が聴いて採否が決定されるといふものである。思案の末「蜘蛛の糸」を選んだ。録音した自分の声を聞くのも朗読の試験も初体験であったが、何日かの練習が運をもたらしてくれたのか、テープ試験は無事通過した。そのあとの一ヶ月の講習には鼻濁



冬の芽や悔いもそろそろ時効とも

行儀よく収められたる松葉蟹

流水や浜のをんなは浜に老い

荒磯に積み残されし雛かな

山を焼くはじめ松明分け合ひて

一粒の雨にうなづく犬ふぐり

牧開く水音高き林抜け

正客の前にすゑたる桜鯛

竜天に箱を出でざる日章旗

音、アクセント、本読みのプログラムがある。アクセントは大きな壁として残った。

資格取得後の初仕事は、文学のジャンルを希望していたにも拘らず、医学書の朗読であった。目の不自由な若い医学生を前にして読み始めたのだが、専門用語の壁に突き当たってしまった。その都度精通する青年に教わる始末。朗読の深さ、人の役に立つという事の難しさを現場で思い知らされた。久しぶりに「蜘蛛の糸」を朗読してみる。

或日の事でございます。お釈迦様は極楽の蓮池のふちを独りでぶらぶら御歩きになつていらつしやいました。池の中に咲いてゐる蓮の花は、みんな玉のやうにまつ白で、そのまん中にある金色の蕊からは、何とも云へない好い匂が…

声にして読む幸せがここにある。自分なりのやり方で進もうと思う。少しづつ壁は低くなるかもしれない。

冬
麗

服部 早苗

末枯れて草叢に日の入りにけり

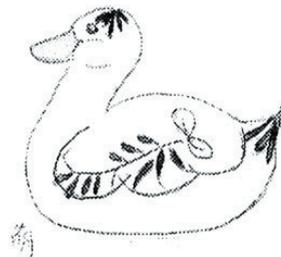
秋の日の掌に胎動をききみたり

倒木となりゆくあはひ威銃

等身の鏡を置いてゆきし秋

猫脚の影のまるみも文化の日

白鳥にうすうすと曳く田の煙



陣痛室には家族の者一人しか入れないのだが、夕方駆けつけた私を、娘の夫は手招きして中に入れてくれた。中ではすでに娘が十五分ごとにくる陣痛に顔をしかめていた。ふと見ると枕元に心電図のような波形が二本、ひとつの画面に動いている。陣痛の波動と胎児の心搏の波動なのだとか。お腹に電

平穩な日に染まりゆく懸大根

初霜や町を流るる川の幅

咳こぼすひとつふたつと人の名も

かつこめの稲穂こぼるる冬暁

笹鳴や郵便受けに陽のさして

冴ゆる日の子を産みをへし熟寝なり

冬麗の生後二日の赤子抱く

人日や生みをへて眉澄みみたる

松明けてオレンジ色の授乳室

極が貼り付けてあるらしい。同時に、その画面はナースステーションでも映っていたのだった。(後に分かったのだが)それから十八時間後、娘は無事に出産。病室に戻ってきた。心地好い虚脱感に浸りつつ、娘夫婦と、この激動の二日間の話となる。「看護婦さんに、痛い、と訴えても『まだよ』と笑って去って行かれて辛かった。」と娘。「そう、画面の波動で分かるからね。」「いよいよ分娩室へ行くとなった時、この二つの波動は一致して動いていた。」と冷静な彼。陣痛の最大の高まりと、胎児の生まれ出ようとすると心搏の高まり、この二つの波動の見事な一致を目の当たりにし、彼は、父親になるという実感を、きつと得たに違いない。急にお腹が空いてきたらしい。そうだろうと思つて作ってきたおむすび。二人は黙々と頬張る。おじやま虫と思いつつ、私もそこで黙々と頬張った。